

ロドスのアポロニオス (3)

高橋 通 男

1 689—692

Ἦ μὲν ἐγὼν, εἰ καὶ με τὰ νῦν ἔτι πεφρίκασι
 Κῆρες, ἐπερχόμενον που οἶομαι εἰς ἔτος ἤδη
 γαίαν ἐφέσσεσθαι, κτερέων ἀπὸ μοῖραν ἐλοῦσα
 αὐτως ἢ θέμις ἐστί, πάρος κακότητι πελάσσαι.

691 ἐλοῦσα Platt : ἐλοῦσαν Ω

691行において、全ての写本は ἐλοῦσαν を伝える。ἐλοῦσα は A. Platt による修正である (JPh 34, 1918, p. 129f.)。近年の校訂者達はこの修正を採用する傾向にあり、F. Vian もその一人である。Platt の修正は一応妥当性があると言えよう。というのは、ἐγὼν… οἶομαι … γαίαν ἐφέσσεσθαι, … ἐλοῦσαν という文章は文法的に見て少し疑問を引き起こす。この文章において、ἐλοῦσαν は明らかに不定法 ἐφέσσεσθαι の意味上の主語と同格になっている。更に、ἐφέσσεσθαι の主語と οἶομαι の主語は同一である。このような場合、つまり、verba dicendi et sentiendi の構文においては、主動詞と不定法の主語が同一である場合、不定法の主語は、ラテン語とは異って、人称代名詞の対格で表現されることなく省略される。更に、不定法の主語が形容詞又は名詞によって述語的に限定される場合、この形容詞又は名詞は Attraktion によって主格形に置かれる。この原則に従うと、ἐλοῦσαν は文法的に誤りであって、主格形 ἐλοῦσα とならなければならない。これが Platt の修正の理由であり、彼以降の校訂者が ἐλοῦσα と書く必要を認める理由になっている。

しかし、上に述べた原則が絶対に破られる事は無いというわけでもない。この原則にも例外が有る。先ず、不定法の主語についてであるが、主動詞と不定法の主語が同一であっても不定法の主語が強調される時には、ラテン語の場合のように不定法の主語が示される。例えば、θ221, τῶν δ' ἄλλων ἐμέ φημι πολὺ προφερέστερον εἶναι : H 198f., ἐπεὶ οὐδ' ἐμὲ νῆιδά γ' οὕτως / ἔλπομαι ἐν Σαλαμῖνι γενέσθαι : N269, οὐδ' ἐμέ φημι λελασμένον ἔμμεναι ἀλκῆς。しかし、Υ361, οὐ μ' ἔτι φημὶ μεθυσέμεν οὐδ' ἠβαιόν と

いう例においては強勢のない代名詞 *με* の形が使用されている。強調は全く稀薄である。最初の三例においては、当然の事であろうか不定法の主語の同格語の形容詞或いは分詞も対格形に置かれている。

次に、不定法の主語としての人称代名詞が表現されないで、同格語のみが対格形のまま残っている例はどうか。つまり、*έλοῦσαν* に相当する例である。i.224—5 はまさにその例証である。

*ἐνθ' ἐμὲ μὲν πρῶτισθ' ἔταιροι λίσσονται ἐπέεσσι
τιρῶν αἰνυμένους ἰέναι πάλιν ;*

この例では、原則に従えば *αἰνυμένους* とはなり得ないはずである。散文においてもこのような *Attraktion* の無視はしばしば行われる。特に挿入句において。例えば、X. Cy. 3. 2. 20, *ἔφασαν οἱ Χαλδαῖοι· πολλὰ γὰρ ἂν ὠφελείσθαι οὐδὲν πονοῦντας* (本来なら *πονοῦντες* とすべきところである)。この意味では *έλοῦσαν* の文章, *κτερέων… ἐστὶ* は正しく挿入句である。もう一つ散文の例を挙げる。*οἶμαι δεῖν* の構文においても不定法の主語の同格語は主格形に置かれなければならないのだが、これに反して、Dem. 1. 16, *οὐ μὴν οἶμαι δεῖν τὴν ἰδίαν ἀσφάλειαν σκοποῦνθ' ἵποσθείλασθαι περὶ ὧν ὑμῖν συμφέρειν ἡγοῦμαι*, という例がある。これらの例は或いは日常語的表現であると言えるのかも知れない。

以上の事を考えに入れると、全写本が伝える *έλοῦσαν* という読みは誤伝であると割り切って考えることは出来ないように思われる。写本が伝える *έλοῦσαν* はかなり可能性がある。

1. 985—7

*ῥοῖ δ' εἰσανέβαν μέγα Δίνδυμον, ὄφρα καὶ αὐτὸς
θηήσαιντο πόρους κείνης ἀλός· ἐν δ' ἄρα τοί γε
νῆα Χυτῶ Λιμένι προτέρου ἐξῆλασαν ὄρμον.*

986 ἐν δ' Ω : ἐκ δ' E : : ἐνθ' Z(marg.)

987 Χυτῶ Λιμένι Et. Mag. : Χυτοῦ Λιμένους Ω

上に掲げたテキストは近年の校訂者達が採用する読み方である。これを検討する前に先ず Ω が伝える読み方から考えてみたい。E 以外の諸写本の読み方であるからだ。

ἐν δ' ἄρα τοί γε / νῆα Χυτοῦ Λιμένους προτέρου ἐξῆλασαν ὄρμον.

この冒頭の部分を E は *ἐκ δ'* と伝えている。*ἐκ…Χυτοῦ Λιμένους* と読ませるための写本作製者の修正と考えると良い。*ἐν* は Ω の欠点であったのである。Brunck はこの E の読み方をそのまま採用した。

ἐκ δ' ἄρα τοί γε / νῆα Χυτοῦ Λιμένος προτέρου ἐξήλασαν ὄρμου.

「それから彼等は船を *Χυτὸς Λιμῆν* という (或いは, *Χυτὸς Λιμῆν* の中の) 碇泊地から漕ぎ出した」と解せよう。*ἐξήλασαν* はアオリストであるから船は *Χυτὸς Λιμῆν* の外に出たという事実を言っていることになろう。Brunck は特に注意を払わなかったらしいが、実はこの読み方は一つの問題を提起するのである。というのは、次の 899 行以下の叙述において、大地が生み出した巨大な怪物共が現われて、この港の入口 (990 *Χυτοῦ στόμα*) に岩を投げ入れて塞ぎにかかった、と述べられている。丁度、海の獣を内側に閉じ込めるように (991 行)。この事は船が未だ *Κυτὸς Λιμῆν* から外に出ていないことを物語っているようである。しかも、この巨人達に対抗してヘラクレスと英雄達は防戦し、次々に巨人達を殺してゆくのである。最後に巨人達の死体が浜辺に倒れている模様が語られる。この矛盾は *νῆα*…*ἐξήλασαν* という行為の方向を改めて考えさせることになった。即ち、彼等は船を *Χυτὸς Λιμῆν* から漕ぎ出したのではなく、この港の中に漕ぎ入れたのだ、という推定を呼び起したのである。Merkel は次のように直した。

ἐκ δ' ἄρα τοί γε / νῆα Χυτὸν Λιμένα προτέρω ἐξήλασαν ὄρμου.

「彼等は碇泊地から *Χυτὸς Λιμῆν* へと船を漕ぎ進めた」と解せよう。大幅な修正である。ここで *προτέρου* を *προτέρω* としたのは、964—5 行の *πέπιθον προτέρωσε κίοντας / ἄστεος ἐν λιμένι* に基づいている。但し、この読み方では巨人達が岩を投げた時船が何処に居たのか分りにくい。既に港の中に入っていたと解すべきであろう。Seaton はこの読み方を少し修正して、というより *προτέρω* を写本通り *προτέρου* に戻し、「前の碇泊地から」として出発点を明確にしている。

ところで、次に移る前にこのエピソードの前後のいきさつを少し説明しておきたい。アルゴ号はドリオネス人の島に到達すると先ず「美しい港」に入り碇を降ろす (954 *Καλὸς δὲ Λιμῆν ἰπέδεκτο θέουσαν*)。次に、ドリオネス人達とキュジコス王が彼等を出迎え、この都の港へ船を漕ぎ進めるよう勧める (964—5, *καί σφεας εἰρεσίη πέπιθον προτέρωσε κίοντας / ἄστεος ἐν λιμένι πρυμνήσια νηὸς ἀνάψαι*)。次の詩行ではアルゴナウタイがアポロンに犠牲を捧げる模様が語られるのである。

アポロニオスの語りは余りに簡潔すぎて英雄達が上陸した地点が何処なのか文脈からは少々分りにくいところがある。彼等はキュジコスの勧めをすぐ実行して *ἄστεος λιμῆν* に碇泊したのかどうか。もしそうであるならば、その碇泊地は *Καλὸς λιμῆν* の中にあるのか、或いは *Χυτὸς λιμῆν* (これは人工的に築かれた港である) を指しているのか。Brunck の読み方では *ἄστεος λιμῆν* と *Χυτὸς λιμῆν* は同一ということになる。しかしこの読み方には矛盾が生じて手直しされた。このことは既に述べた通りである。それではこの二つの碇泊地を別ものと考え、最初に碇を降ろした場所 (954—958), *ἄστεος λιμῆν*, そして *Χυτὸς Λιμῆν* の三つの碇泊地を数えることになる。E. Fitch はそれに間違いないと

断言している (AJPh 33, 1912, p. 43—56)。これに対して Mooney は再び ἄστεος λιμῆν を Χυτὸς Λιμῆν と解して次のような読み方をした。

ἐκ δ' ἄρα τοῖ γε / νῆα Χυτοῦ λιμένος προτέρω ἐξήλασαν ὄρμον.

写本の Χυτοῦ Λιμένος を生かし, Merkel の προτέρω を採り, ὄρμον を ὄρμον と直している。彼はこれに, “rowed the vessel forward to the mooring-place of the harbour called Chytus” という訳を付している。ここで Merkel の προτέρω を採用する理由として 964 行の προτέρωσε κίοντας ἄστεος ἐν λιμένι を出しているから, この時点で英雄達は キュジコスの勧めを実行したと解していることになる。Mooney が ἄστεος λιμῆν を Χυτὸς Λιμῆν と解していると考えた理由がここにある。

扱て, 以上の推定よりも鮮明な推定をしたのは A. Platt である (JPh 33, 1914, p. 11f.)。Fränkel, Vian など近年の校訂者達に受け入れられている。彼は Et. Mag. の引用を重要視する人である。この辞典の Χυτὸς Λιμῆν の見出し語は Χυτῶ Λιμένι (816. 14) となっていて, 説明の最初に Παρὰ Ἀπολλωνίῳ Χυτὸς λιμῆν Κυζίκου. と書かれている。ここで, 見出し語が Χυτὸς Λιμῆν ではなく, Χυτῶ Λιμένι となっている点が重要なのである。つまり, この辞典の編者はアポロニオスのテキストから, そこに使われている語形をそのまま拾って見出し語にしたのだと考えられるからである。A. Platt はこの Χυτῶ Λιμένιこそアポロニオスの正しいテキストであると考えた。事実この読みは Ω の読み ἐνδ' にびたりと適合する。

ἐν δ' ἄρα τοῖ γε / νῆα Χυτῶ Λιμένι προτέρου ἐξήλασαν ὄρμου.

「船を前の碇泊地より漕ぎ出して Χυτὸς Λιμῆν の中へ入れた」と解せられる。非常にすっきりとするわけである。しかし, この場合 Ω の Χυτοῦ Λιμένος をどう説明すればよいのか。Fränkel は, προτέρου との Assimilation による写字生の誤記, と説明する。それでは何故 Merkel はじめ他の校訂者が Et. Mag. の読みを採用しなかったのか。理由は, ἐν λιμένι ἐξήλασαν ὄρμου という構文がいかにも座りが悪いと感じたのであろう。ἐν + 与格の表現は運動及び方向性に欠けるのである。εἰς + 対格であったならば問題はなかったであろう。ともかくアポロニオスの場合この ἐν は考えにくいということである。しかし, 前置詞 ἐν は動詞自体が運動を示す場合には “into” の意味を持ち得る。アポロニオスにはそのような例が一つだけある: 2. 924—5, ἐκ δὲ βαλόντες / πείσματ' ἐν αἰγιαλῶ.

現在のところ Platt の読み方が妥当と思われる。しかし, この読み方にも難点が無いわけでもない。これに依ると, ἄστεος λιμῆν への碇泊を勧められた (964—5) あと, すぐに英雄達はその港に入り, 上陸してアポロンに犠牲を捧げていることになる。翌朝, 英雄達は二隊に分かれ, 一方はディデュモン山に登り, 他方は船を動かす。この場合, 何故改めて船を Χυτὸς Λιμῆν に入れなければならないのか。地図によると (F. Vian 及び上掲の E.

Fitchを参照), 両者は反対方向へ向うことになる。尤も, アポロニオスの語りは余りに簡明すぎる, というより乱雑である。アポロニオスがこの辺りの地形にどれだけ詳しい知識を持っていたのか不明であるので, このように詮索する事も妙と言えは妙なのだが。ともかく, 最初の碇泊地に船を戻しておく方が効率が良いと思われる節もある。次に, ἐν δ' という読みについてであるが, Parisinus gr. 2844 (Z) という写本の余白に ἐνθ' と書かれている。この ἐνθ' は何を意味するのか。この写本は Vratislaviensis Rehdigeranus 35 (W) の写しである。Wは余白に沢山の異読が記入されているという点で特長がある。それらの異読の中には出処の不明なものが含まれている。ἐνθ' もその種の異読の一つと言えようが, 或いは誰かの推定であるかも知れない。いづれにせよ, この ἐνθ' はテキストの別の姿を見せてくれる。ἐνθ' によって一つの定型句が生れるのである。ἐνθ' ἄρα τοί γε である。この定型句を, ヴァリエーションを含めて, アポロニオスは6回使用している。しかも必ず詩行末に置く。ホメロスには4例しかなく, その中で詩行末に置かれるのは一回のみである (Ω 122)。これはアポロニオスの好みの定型句の一つと言って良い。この定型句は二つのグループ又は二人の人の行動をはっきりと対立させて叙述する場合に使われている。例えば, 1. 912—15, *πρυμνήσια δέ σφισιν Ἄργος / λύσειν ἰπέκ πέτρης ἀλιμυρέος. Ἐνθ' ἄρα τοί γε / κόπτου ὕδωρ δολιχῆσιν ἐπικρατέως ἐλάττησιν.* 985—6行においても, ἐνθ' ἄρα τοί γε と読む事によって, τοί は εἰσανέβαν (985) の主語とは別の人々であることが判然とするのである。次に 987 行の *προτέρου* は *Χυτοῦ Λιμένος* 及び *ὄρμου* との Assimilation による誤記と考えて, *προτέρω* と読んでみる。「それからその場所に居たもう一方の者達は *Χυτὸς Λιμῆν* の停泊地から船を前方へと……」という事になる。*ἄστεος λιμῆν* と *Χυτὸς Λιμῆν* であるが, これらは同一のものと考えて見たい。*Χυτὸς Λιμῆν* は築港である。だからこれがこの都の港 (*ἄστεος λιμῆν*) であろう。更に言うなら, 後に残ったヘラクレスと若者達 (992—3) は未だ漕ぎ出していなかったのではないだろうか。というのは, 巨人共が港の入口に岩を投げて邪魔をした (989—990) と述べられているからである。彼等は「船を漕ぎ出そうとしていた」と考えられる。そうすると, ἐξήλασαν ではなく ἐξήλαον であったかも知れない。εἰσανέβαν (985), ἔβησαν (987), φράξαν (990) 等の Assimilation によって ἐξήλασαν と書き換えられたとも考えられる。

以上の事から, 次のように推定してみた。

ἐνθ' ἄρα τοί γε / νῆα Χυτοῦ Λιμένος προτέρω ἐξήλαον ὄρμου.

1. 1159—61

ἔμπης δ', ἐγρομένοιο σάλου ζαχρηέσιν αὔραις,
αἶ νέου ἐκ ποταμῶν ὑπὸ δείελον ἠερέθονται,

τειρόμενοι καμάτῳ μετελώφειον.

1161 *καμάτῳ* Et. Mag. : *καὶ δῆ* Ω

1161 行の読み方は校訂者達の間で二転三転と採用が一定しない厄介な問題の一つである。伝えられている二つの読み、*καὶ δῆ* と *καμάτῳ* は何ら共通点を持っていない。*καὶ δῆ* は現存の全ての写本が伝えるものであり、*καμάτῳ* は Et. Mag. の *λωφῶ* の頃の引用 (571, 14) に基づく。*τειρόμενοι καμάτῳ μετελώφειον* とある。これは明らかにアポロニオスのテキストよりの引用と考えられる。

扱て、現存する全ての写本の元になっていると想定される写本 Ω、及び、Et. Mag. 中に引用されるアポロニオスのテキストに使用されたと想定される写本 Ψ は共に 5 世紀頃の想定上の一写本 X に源を発していると想定される。Et. Mag. は Et. Gen. という辞典をもとにして作られた。X → Ψ → Et. Gen. → Et. Mag. ということになる。Et. Mag. の編纂の年代は不確定であるが、1175 年にテサロニカの司教となったエウスタティウスが使用したと伝えられている。Et. Gen. は 9 世紀末に編纂されたい。Ω 系統か Ψ 系統か、どちらかの写本が、どこかの時点で故意にか偶然にか誤りを犯したということになる。

この読みの採用は二転三転していると初めに述べたが、例えば、Brunk は *καμάτῳ* を、Seaton, Mooney は *καὶ δῆ* を採った。しかし、最近では *καμάτῳ* の方が好まれ再び採用されている (Fränkel, Vian)。*καμάτῳ* はそれだけの魅力と説得力を持つ。というのは、ホメロスの詩句の中に真に都合の良い例証が有り、この読みを援護しているからである。

P 745 *τείρεθ' ὁμοῦ καμάτῳ τε καὶ ἰδρῶ σπενδόντεσσιν*

この詩行中の *τείρεθ'…καμάτῳ* をアポロニオスが利用したのだと考えるわけである。*καμάτῳ* はアポロニオスの文脈にも良く適合する。場面は次のようなエピソードの一部である。

ドリオネス人達の処に滞在していた英雄達は嵐の止むのを待ち、夜明け、海が静まると海に乗り出し、終日オールを漕ぎ続ける (1151ff)。夕方になり、河より激しい風が起り、海上が波立った時 (1159—60)、彼等は「骨折りで」(*καμάτῳ*) 「疲れ果てて」(*τειρόμενοι*) オールを漕ぐのを「止めていた」(*μετελώφειον*) (1161)、というように話が進行している。*καμάτῳ* には文句のつけようがない、むしろ出来すぎである。

それでは、*καὶ δῆ* という読みはどうであろうか。文脈を示すと、*ἔμπης δ', ἐγρομένοιοι σάλου ξακρηέσιν αὔραις … τειρόμενοι καὶ δῆ μετελώφειον*, となる。この場合、*καὶ* は接続詞ではないことは明白である。*καὶ δῆ* は少々唐突であって、文章をぎくしゃくしたものにしている感は否めない。しかし、アポロニオスが *καὶ δῆ* とは書かなかったと断言する訳にはいかない面も有る。

καὶ δὴ という小辞のセットにおいて *καὶ* の接続詞としての性格が無くなっている用例は既にホメロスに現われている。或る事が起っている瞬間を生々と描写する際に使われる。多分に感覚的であって、「ほら見てごらん」或いは「ほら！」などの意味に解される (e. g. Φ 421, μ 116)。しかし、一般的には文頭に立つ。アポロニオスの当該箇所には意味上も位置の点でもなじまないと見えよう。*καὶ δὴ* の用法の中で有力なのは、「そして既に」、「そしてその時迄に」という意味の場合であろう。つまり、*καὶ ἤδη* と同じ意味に使われる場合である。ホメロス中の一例を挙げる。

O 251 *καὶ δὴ ἔγωγ' ἐφάμην νέκυας καὶ δῶμ' Αἴδαο / ἤματι τῶδ' ἔξεσθαι*,
この用法では *καὶ* は接続詞の性格を残している。しかし、*ἤδη* の意味だけについて言うなら、アポロニオスの文脈に十分適合する。「風が起り、海が波立った時、その時まで既に彼等は疲れ果て、(漕ぐのを) 止めていた」ということになる。*τείρειν* の受動態が疲労の原因を与格形で示すことなく独立的に使われる例をホメロスに拾うことが出来る (e. g. Δ 801)。ところで、この *καὶ δὴ* = *καὶ ἤδη* は文頭ではなく文中に入るにつれて概ね *ἤδη* と同じ意味に使われるようになる。その場合、概して副文節を導入するが多い。歴史記述に使われる場合が多いようである。例えば、Hdt. 9. 66 *προτερῆων δὲ τῆς ὁδοῦ ὀρᾷ καὶ δὴ φεύγοντας τοὺς Πέρσας*。この例では *φεύγοντας* という分詞節を導入している。X. Cy. 2. 4. 17 *ὅποτε θηρώης καὶ δὴ δύο ἡμέρας*。この例は *ὅποτε* の構文を導入している。J. D. Denniston は文頭の *καὶ δὴ* = *ἤδη* の例を悲劇詩人及び喜劇詩人の中から集めている。

以上のことを考慮に入れるとアポロニオスの場合 *καὶ δὴ* も非常に有望ということになる。このような *καὶ δὴ* = *ἤδη* の用法は未だホメロスには無いが、アポロニオスがホメロスの言語用法を基調としながらも、それ以降の韻文と散文を広く渉獵し、その言語用法をも利用していることは周知のことである。更に付加えると、アポロニオスはこの *καὶ δὴ* を別の箇所でも一回使っている。

2. 1030—2

τοὺς παρανισόμενοι καὶ δὴ σχεδὸν ἀντιπέρηθεν
νήσου Ἀρητιάδος τέμνον πλόον εἰρεσίησιν / ἡμάτιοι

これまでのところでは *καὶ δὴ* の可能性を探ってきたにすぎないが、それでは *καὶ δὴ* と *καμάτω* のどちらがアポロニオスの手になったのかという点になると、決定的な根拠は見当たらない。一つだけ言えることは、文頭の *καὶ δὴ* の例はアポロニオスに数多くあるが、文の中間に置かれた例は、問題の箇所を除くとただ一例のみである、ということだ。それ故、このような *καὶ δὴ* は写字生を当惑させたであろうと想像される。特に文章の意味を解しようとした場合には、従って、誰かが写本を作りながら修正も施こそうとしたならば、この箇所の *καὶ δὴ* は容易にその対象になり得たであろう。この *καὶ δὴ* には危険がいっぱい

あったのである。翻って、*καμάτω* を *καὶ δῆ* に修正するということは想像し難いのである。また、Et. Mag. は Et. Gen. その他の辞典をもとにして作られたのであるが、引用されている文章は、文脈を切り棄てた *τειρόμενοι καμάτω μετελώφρον* だけである。しかも、引用の主眼は *μετελώφρον* に有る。Et. Mag. はアポロニオスよりの引用に富んでいて、しばしば正しい読みを保存していることも事実である。しかし、この語句に関して言うならば、仮に *τειρόμενοι καὶ δῆ μετελώφρον* と最初の引用者が書いたとしても、次にこれを筆写する人にとっては *καὶ δῆ* は意味を為さないであろう。何故なら、この *καὶ δῆ* は文脈の中に有ってはじめて理解し得る言葉だからである。*καὶ δῆ* を韻律も合う *καμάτω* に直しても不思議はない。ホメロスに現われる表現であり、アポロニオスはそのように書いたと考えたかも知れないからである。大辞典を筆写する際、引用文を全て各作家のテキストによってチェックしたのなら別であるが。いづれにせよ、*καμάτω* を *καὶ δῆ* と書き換える可能性より *καὶ δῆ* を *καμάτω* と直してしまう可能性の方が強いと言えよう。アポロニオスは *καὶ δῆ* と書いたのではないだろうか。